Policy Topics

海外における日本語普及政策の展望と課題[1]

A Prospect and Obstacles on Promotion Policy of Oversea Japanese-Language Education

市嶋　典子[2]
Noriko Ichishima

シリアは現在、深刻な内戦状況にあり、人々が生きていく上でのあらゆる権利が奪われている。市嶋(2017)では、このような困難な状況にありながらも、日本語を学ぶという営為を生きるための希望として意味づけ、日本語を学び続けるシリアの日本語学習者の存在を明らかにしてきた。また、近隣のアラブ諸国や欧米に流出するシリア難民の問題を指摘しているが、この難民の中には、日本語を学び続ける日本語学習者が少なからず存在している。

本発表では、シリアで日本語を学ぶ学習者、難民として海外に渡った日本語学習者の語りに注目し、内戦によってあらゆる権利が損なわれた環境にある中、彼女／彼らが、いかに日本語学習を維持し、日本語にどのような意味付けを行っているのかを示した。その上で、海外における日本語普及政策の展望と課題を主張した。

発表では、2名のシリア出身の日本語学習者の事例を示した。そのうちの1名、ラマ(仮名)は、30代前半(2017年8月現在)の女性である。大学の専門は地理学であるが、アニメに興味を持ったことから日本語を学び始めた。彼女は、2006年から2010年までダマスカス大学日本研究センターで日本語を学び、中上級レベルまで進んだ。その後、内戦が勃発し、日本語教育機関が閉鎖されたことから、独学で日本語を学ぶことを余儀なくされることになる。内戦勃発前は、趣味として日本語を学んでいたが、内戦後は、自身と内戦、日本語との関係を深く考えるようになっていった。そして、内戦状況と日本語について以下のように語った。(以下の語りは、2016年11月18日、2016年12月16日に行ったインタビューを文字化したものの一部である。)

「でも残念ながら、な、何回も、あの、日本語を忘れて欲しいと考えていましたけど、でも、あの、なんか、できなかった。本当に。(中略)あの、とてもつらい経験でし、でしたから(中略)です、ですから私は日本から怒っています。ちゃんと何か、シリアの戦争の前は、あの、こんな強い努力をやったり、スピーチコンテストとか日本語、日本フェスティバルとか。日本はシリア人の、あの、みんな教えることとか、何か突然戦争のせいで日本は、あの、いなくなって、何もいません、聞こえません。学生にも、もう、私は関係ない。何か捨ててしまう。それは、ちょっと、日本は、これは、日本の問題です。これはあなたの何かのの言葉、あなたの日本語です。本当に守りたい場合は、あの、ちょっと守ってください。あなたのやったことを守ってください。ただ、逃げてしまうは、解決できません。」

ラマは、日本語を学べなくなってしまったことを「とてもつらい経験」と表現し、何度も日本語を

1　本稿は2017年12月19日(火)本学神戸三田キャンパスでの講演をもとにしたものである。
2　秋田大学国際交流センター准教授

忘れようとしたが忘れられなかったという自身の経験を語った。そして、内戦により、シリアの日本語学習者達が、日本語を学べなくなってしまった状況に対して、日本政府が何もしようとしないことに疑問を呈している。

かつて、シリアには国際交流基金から日本語教育の専門家が、国際協力機構から青年海外協力隊の日本語教師が派遣されてきた。しかし、2011年3月に完全撤退して以降、日本政府によるシリアへの日本語教育支援は打ち切られた。ダマスカス大学日本語学科は、継続困難になったことから、2014年には新入生の募集を中止し、閉鎖することがほぼ決定した（市嶋2017）。ラマは、内戦前には日本語教育に関する様々な取り組みがなされていたが、内戦勃発後は、シリアの日本語学習者があたかもいなかったように見捨てたとし、それは納得できないことであると語った。そして、日本が、シリアの日本語学習者の存在から目をそらさず、支援していくべきだと強く認識している。

また、ラマは日本語について以下のように語った。

「日本語は、自分の中で、ちょっと入っているから、私の体の中でになっていますから、ですから好きです。理由がなくても好きです。そういうことになっています。私をつくります。（中略）日本語、日本語の学ぶは、どんな大変な時でも、私が生きているため、やっぱり希望です。（中略）戦争が終わりなった時、私がシリアの未来をつくります。他の人にお願いしたくない。その時、日本語は武器になるはずです。」

上記の語りから、ラマが、日本語をシリアの未来をつくる「武器」として捉えていることが分かる。また、自身の誇りを形成するものの一つであり、内戦という困難な状況を生き抜くための希望として意味づけていることがうかがえる。いかんともしがたい内戦状況が現前している状況の中でも日本語を守りつつ、戦争の終結、未来の平和を志向していることが見て取れる。ラマから日本語が奪われるということは、ラマの存在意義が奪われるということに等しい。ラマにとって、日本語は、自身の誇りを形成するものの一つであり、内戦という困難な状況を生き抜くための力なのである。

発表では、ラマのように、日本語に特別な意味付けをする日本語学習者として、アリ（仮名）の事例も示した。アリは、30代後半（2017年8月現在）スウェーデン在住の男性である。彼は、2001年から約6年間、ダマスカス大学付属言語研究所・日本研究センターで日本語を学んだ。彼は、シリア内戦後、ヨルダン、エジプトへ避難し、難民として生活した。その後、エジプトから難民船でイタリアのシチリアへと渡り、フランス、ドイツ、デンマークを経由して、スウェーデンにたどり着いた。現在は、スウェーデンにある日本人会に所属しながら、独学で日本語を学んでいる。アリは、内戦や日本語について、以下のように語った。（以下の語りは、2016年12月30日、2017年1月21日に行ったインタビューを文字化したものの一部である。）

「誰でも、私をアリさんとして見なくて、難民で見られますね。私の名前〇〇だけど、皆さん難民だと言う。そのイメージも私の歴史でも、私の家のこととか、私の文化とか、誰もよく分からない、私のこと。それはちょっと難しい。このこと理解できて、だから信頼作つくるのはちょっと難しかった。」

「だけど、ここの日本人会に参加して、日本人じゃないメンバー、私だけだけど（笑）いろんなことして、自分の、みんなから信頼もらって、自信ができてきた」

アリは、スウェーデンで、個人としてではなく、難民としてカテゴライズされることに葛藤を感じていた。また、自身のことを理解してもらい、人と信頼関係を作ることの難しさを語った。そんな困難な状況にある中、彼は、スウェーデンの日本人会に参加することによって、自身の居場所を形成していった。アリは、上記以外にも、日本人会では、会議の議事録をとったり、餅つき大会の準備や運営に関わったりしていたと述べた。また、会への参加を通して、日本語の漢字や語彙、表現を学んでいると語った。そして、日本人会の人々との交流が彼の心の安定や自信へとつながっていったと言う。また、アリは、日本語について、以下のように語った。

「日本の国民は大体シリアのこと知らない。シリアだとISのイメージしかないから最近。それは残念だけど、だから私、日本語で何かビデオしたいと思う。(中略)もちろん。そのこととか、難民のイメージとか、その今までの私の人生ということ見せたいから。」

「あとは、シリアが平和になったら、いつか、日本語が役に立つっていう希望です。」

アリは、日本語によりシリアのマイナスイメージを更新したいと願っており、自分の人生を発信していこうと考えていることが分かる。そして、日本語がシリアの平和に寄与する希望になりうると考えている。だからこそ、スウェーデンにおいても、日本語を学び続けているのだ。

海外における「日本語普及」は、日本の経済の動向や諸外国との関係に影響を受けながら推進され、知日派、親日派を形成し日本の国益に寄与するものとして位置づけられてきた。しかし、シリアのように、内戦などの影響により、当地で「日本語普及」の継続が困難になったケースについては、その限りではない(市嶋2017)。一方で、日本の政府機関が撤退した現在、シリアやスウェーデンでは、日本政府の意図とは異なる意味付けをもって日本語学習が進められている。そこには、経済政策や国家戦略の枠組みではとらえきれない、日本語の意味付けが存在する。ラマとアリにとって日本語は、内戦を生き抜くための希望として意味づけられていた。だからこそ、いかなる状況にあろうとも、二人は日本語を学ぶことを断念しようとしない。内戦状況下においても、人間の営みは続く。ラマとアリは、内戦が続く今も、日本語を学ぶという営みを続け、内戦という日常とは異なる日常を自らつくり、維持しようとしている。日本語は、内戦下のシリアにおいて、生きがいのある日常を作る媒体になりうるのだ。

日本語教育において、日本語能力試験の認定基準やOPIの判定尺度などが、日本語能力の熟達度を示す枠組みとして機能してきた。国際交流基金では、日本語能力試験の他にも「JF日本語教育スタンダード」を促進している。これらは、日本語学習者の日本語能力を測定するために機能し、日本語教育を推進してきた。一方、細川(2016)は、個別の「能力育成」ではなく、より包括的な、生きるための「考える個人」の形成、「人間形成」としてのことばの教育が重要であると述べている。内戦状況にあるシリアでは、今、まさに生きるための日本語が必要とされている。日本語能力を向上させるためだけの日本語教育ではなく、内戦を生き抜くための希望としての日本語学習環境こそが必要なのだ。そのためにも、今後、「人間の生の充実とそれを支えるための言葉の創造という日本語教育学的な知」(市嶋2014:259)の構築を目指し、シリアの日本語学習者のために筆者自身に何ができるのかを考えていきたい。

【参考文献】

市嶋典子（2014）『日本語教育における評価と実践研究―対話的アセスメント:価値の衝突と共有のプロセス―』ココ出版

市嶋典子（2017）「内戦，国家，日本語―シリアの日本語学習の語りから」『現代思想（特集：いまなぜ地政学か―新しい世界地図の描き方）』2017年9月号＝45(18)，236-245.

細川英雄（2016）「第１章 市民性をめざす言語教育とは何か」pp.2-19『市民性形成とことばの教育―母語・第二言語・外国語を超えて』細川英雄・尾辻恵美・マルチェッラ・マリオッティ（編）くろしお出版